

雅楽を支えるヨシ

鶺鴒の価値

ひちりき 箏

指孔 前7後2
管長 18.2cm 6寸
材質 煤竹
雅楽の主旋律楽器

ろぜつ 蘆舌

箏のリード
全長 55mm
直径 11.5~
12.7mm
材質 ヨシ

古来 蘆舌のヨシ
は鶺鴒産を
最良とする

日本には
奈良時代
唐より
遣唐使や
留学僧が
持ち帰り
伝わる

日本唯一の蘆舌産地



雅楽とは

ユネスコ無形文化遺産に認定された雅楽は 上代日本から伝わる簡素な歌舞と 唐や高句麗などからの外来の華麗な舞楽があります 舞楽は奈良時代に遣唐使や留学僧が持ち帰り 平安中期に日本化した歌・舞・管絃の総合芸術です

箏とは

宮中の儀式や饗宴に活躍する雅楽の箏は 奈良時代(701年)に設けられた「雅楽寮」(国立音楽大学)の記録に箏の名が見られます 箏は古代オリエントに生まれ 漢の時代に中国に伝承されたヨシを吹き口(リード)にした管楽器(リード楽器)です

その箏は 手のひらに収まるほど小さな楽器ですが 音量は大きく そのため雅楽の主旋律を受け持つ重要な楽器です

蘆舌とは

箏の特徴は その独特な音色にあります これはダブルリード楽器共通の音質で オーボエやファゴットのように哀愁を帯びた牧歌的な響きがあります ただ初心者練習中の音だけは別で あの清少納言は まるでクツムシのように髪逆立つほどいやだとその音を酷評しています この特徴をつかさどるのがヨシでできた吹き口(リード)の蘆舌です 口にくわえて音の出る方は平らになった上下二枚のリードで箏本体に差し込むのは筒状のままです オーボエなどは二枚の平らなヨシをパイプにかませて糸で縛りますが 蘆舌は片方が筒状なのでコアリードです



鶺鴒で採れる蘆舌用ヨシ



地元が刈り取り 合掌造りで燻蒸 蘆舌作り 奥田貞次氏 元宮内庁楽部首席楽長 故東儀兼彦氏
1月に刈り 3年ほど囲炉裏の煙で燻蒸した煤ヨシを切り 片方を熱てつぶして削り 蘆舌が完成 合計数年を経て演奏される

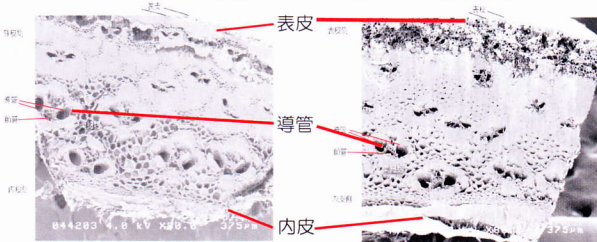
蘆舌は短く切ったヨシの茎の片方を熱しながらゆっくりつぶして端をべしゃんこにします これをヒシギといい 専用のやつとこでつぶし 小刀で薄く削ります これは微妙な作業で 古来より蘆舌作りには 熟練の技術を必要とします



工程とヒシギがね

箏やオーボエもリードは奏者が作るのが本来でこれらの楽器の難しさと奥深さがあります

蘆舌用ヨシの分析



柔軟組織(空間)が多く強度のない普通品 蘆舌用は組織密度が高く均一(鶺鴒産ヨシの断面電子顕微鏡写真 厚み約1mm 倍率80倍)

鶺鴒のヨシが蘆舌に最適であることは 江戸時代の文献に見られ おそらく雅楽伝来以来のことと思われます

なぜ鶺鴒のヨシだけが適しているのでしょうか それは 背が高く太いというサイズの違いもありますが 厚みがあり 弾性に富み割れにくいことが大きな要素 左の写真は ヨシの茎断面の電子顕微鏡写真です 約80倍で撮影 良質の茎は 導管や師管などの空洞が少なく 組織が密で均一(写真右)であることがわかります 組織が粗雑(写真左)だとひしぎ時に中央が割れ とても蘆舌に加工できません

鶺鴒に生えているヨシならどれでも適している訳ではありません ごく限られた場所の中の 何百・何千本に一本なのです この貴重な蘆舌用ヨシを保全することが 世界無形文化遺産を存続させる大きな要素です

箏の来た道

箏は古代オリエントに生まれ シルクロードを東西に伝播 中国や朝鮮半島から極東の日本に伝わる



UDONO de Gagaku



2000年 雅楽演奏会とヨシ原焼き 大阪楽所



2004年雅楽コンサート ヨシ・水・音 桑陽雅楽会



2008年 雅楽と鶺鴒のお話 大阪楽所



2010年 アトリエMay 雅楽演奏会



宮内庁 式部職 楽部 重要無形文化財

鶺鴒の危機! ヨシが無くなる

- 1971年 淀川改修により河床が低下
鶺鴒は 洪水時の冠水がなくなり乾燥化
- 1973年 乾燥化のためつる草のカナムグラ
が大発生 ヨシを倒し
ヨシが減少

ヨシ群落
は60%



鶺鴒の価値
ある水辺を創る

官民一体のヨシ原再生

- 国交省近畿地方整備局淀川河川事務所 (現在)
- 1990年 建設省河川局「多自然型自然管理」提唱実施
- 1994年 淀川工事事務所 揚水ポンプ計画発表

1996年 揚水ポンプ設置・導水路開削工事開始



ポンプ排水口(中央)と水路造成

1997年 河川法改定 治水・利水に環境が加わり
生態系の保全が法律上義務付けられる
淀川環境委員会設置 研究者と河川管理
者が共同で検討 小山弘道委員に

1998年 揚水ポンプ本格稼働
地下水位計・気象観測機器設置



1999年 ヨシの生育面を淀川の水位に近づける
「切り下げ」工事始まる



2010年 揚水ポンプを1基増設
2011年 2基のポンプでヨシに
豊富な水を届け
ヨシ優先群落の拡大に
道を拓いた

1976年 高槻市緑政課と共同でヨシを倒す
つる草カナムグラを調査
淀川問題検討委員会に参加
淀川改修工事の改善要望を
提案し続ける



ヨシ原再生35年の成果

こうした小山弘道の調査・保全活動に学生や一般市民の
参加が始まる 鶺鴒ヨシ原保全活動はまず市民の手で

1996年 調査・保全・広報活動に一般市民ボランティア多数参加
導水路周辺に試験区を設け生育・植物種調査開始

1998年 参加市民が「鶺鴒クラブ」を発足
会報「うどの通信」発行 現在に続く
ヨシ群落15%に回復



1999年 雅楽関係者との出会い
大阪楽所演奏会(左p)
各地に出演展示

2000年 鶺鴒ヨシ原研究所設立
道鶴町に研究所・鶺鴒クラブ事務局を開設

2004年 高槻市より感謝状
おおさか環境賞奨励賞受賞
ヨシ群落22%に

2005年
みどりの愛護で皇太子
殿下に鶺鴒を説明
「愛・地球博」に
出演・講演

現在ヨシ群落は
20%以上に回復
カナムグラとの戦いは続く

2004年 宮内庁楽部 東儀俊美氏視察

2010年 宮内庁楽部 東儀雅季氏と
交流会

